

父親の日中戦争軍隊手帳

—上海から漢口を目指しての行軍記録(1938年)—

山 崎 勇 治
(国際教育交流センター)

キーワード

日中戦争、農民運動、自作農、軽機関銃射手、羅盤山の戦い、赤犬肉事件、軍隊手帳、漢口攻略

目次

はじめに

第1章 日中戦争の背景

第1節 世界恐慌が引き起こした昭和恐慌

第2節 昭和恐慌と農民運動

第3節 島根県の農民運動のリーダー、山崎豊定

第4節 山崎重一郎と松次郎兄弟の苦悩

第2章 日中戦争開始と第63師団第10連隊、高橋部隊の果たす役割

第1節 日中戦争（支那事変）の展開過程

第2節 漢口攻略戦と父の所属する高橋部隊の任務

第3章 山崎重一郎 軍隊日記紹介

第1段階 17歳の日記（昭和9年1月1日—12月31日）

第2段階 赤紙召集から宇品港出航まで（昭和13年1月1日—7月29日）

第3段階 広島宇品港出帆から武漢攻撃命令前まで（昭和13年7月29日—8月29日）

第4段階 武漢三鎮攻撃命令から赤犬肉事件まで（昭和13年8月30日—10月30日）

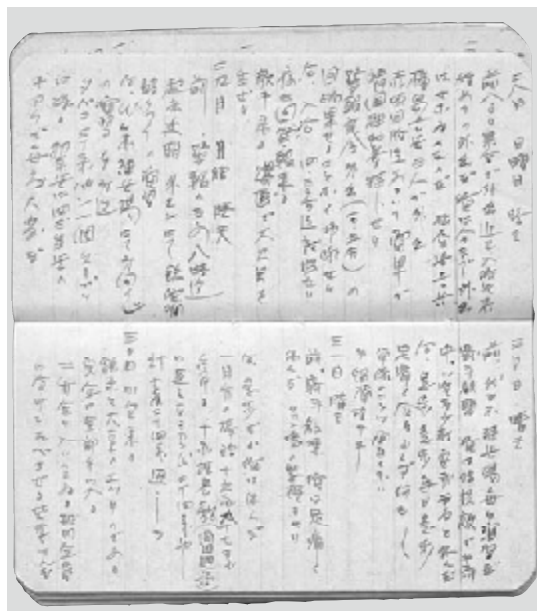
第5段階 入院から回復退院、大晦日まで（昭和13年10月30日—12月31日）

結びに代えて—戦争ではなく話し合いで問題解決を—

父親の日中戦争軍隊手帳



父親の兵隊の写真



父親の日中戦争軍隊手帳

山 崎 勇 治



中国地図

はじめに

8年前に父親は満89歳で他界した。死の直前に父親は彼が大切にしていた軍隊手帳を私たち兄弟に手渡した。

開いてみて驚いたことは、第1に戦時中に毎日の敵弾の降る中でよくも日記をつけていたことである。第2に、それを肌身離さずに大切に持ち歩いてきたことである。第3に、4年間の無事帰国後、この手帳を60年間も保管していたことである。第4に、正直なところ、判読がきわめて困難であったが、助っ人が現れたことである。父親の従兄弟であり、かつ私たち兄弟の叔父にあたる作野啓一郎氏が、彼の死亡の直前に、判読を買って出てくれたのである。作野氏は、従兄弟の山崎重一郎とは幼いころ、彼の母親の里である我が家によく遊びに来て一緒に遊び、父親の性格も心得ていた。さらに、作野啓一郎氏は、大正8年生まれで、しかも彼自身が、徴兵で朝鮮のピョンヤン付近で戦闘経験者であった関係で、父の癖文字も容易に判読し、しかも清書してくれたのである^(注1)。

もともと、父親は幼いころから亡くなる年まで日記をつける習慣を持っていた。彼が17歳の時の日記も存在している。最初に17歳の時の日記を紹介する。なぜならばその当時の農村の光景が彷彿され、多くの農民の男子が戦場へ送られていく前にどんな生活をしていたのかを理解できると思うからである。

そこで第1に重一郎の17歳の日記を紹介する。第2に昭和13年1月の赤紙召集命令から軍事訓練を経て、広島市の宇品港から上海に向けて出航するまで。第3に上海上陸から支那大陸を

行軍して戦場の羅盤山にたどり着くまで。第4に、最大の戦場となった羅盤山での戦闘と、明日の戦いで死ぬと覚悟を決め、最後の晩餐で、路上の赤犬の肉を喰って野戦病院に送り返されるまで、第5に、1か月余りの闘病生活で奇跡的に回復し、昭和14年の正月を迎えるまで。

これらの軍隊手帳を紹介することによって、第1 羅盤山攻略とは何であったのか、第2に兵士がこの戦場でどんな生活をしていたのか、第3に戦争で誰が犠牲になるのか、その本質を明らかにしたい。

第1章 日中戦争の背景

第1節 世界恐慌が引き起こした昭和恐慌

ニューヨークのウォール街の株式の暴落によるアメリカの金融恐慌は世界恐慌を惹き起こした。

世界恐慌対策としてルーズベルト大統領はニューディール政策を、ドイツのヒットラーはナチス経済政策を、イギリスは英連邦を形成して自国の恐慌対策とした。

日本は世界恐慌が引き金になって、日本の重要輸出品である生糸の対米輸出が激減した。このことによる生糸価格の暴落を導火線とし他の農産物も次々と価格が崩落。いわゆる農業恐慌が本格化した。昭和恐慌で、とりわけ大きな打撃を受けたのは農村であった。

第2節 昭和恐慌と農民運動

もともと、第1次大戦後の戦後不況を前にして、小作農たちは小作組合・農民組合を組織して団結を図り、1922年（大正11年）には杉山元治郎・賀川豊彦らによって全国組織である日本農民組合が結成された。

この争議は、昭和恐慌後に再び増加し、東北地方の凶作・農村不況を背景に第二次高揚期を迎えた。

第3節 島根県の農民運動のリーダー、山崎豊定



山崎豊定の農民運動（写真前列中央）

大正末から昭和初期にかけ、島根県能義郡母里から安来へ、そして出雲全域へ農民運動は野火のごとく広がっていった。自由と土地を求める農民の願いがそのエネルギー源であった。

この農民運動の中心的役割をはたしたのは山崎豊定であった^(注2)。日本における農民運動は大正11年（1922年）4月、神戸で開かれた日本農民組合（日農）創立大会により、大きな第一歩をのし取った。この創立大会に、ただ1人島根県から参加していた青年がいた。その青年こそ能義郡母里村の山崎豊定その人である。

豊定の生家は、田1町畑1反、山林2町を目作し、他に小作を4-5反おこなう比較的豊かな農家であった。しかし、同じ集落に住む多くの農家は、全く土地をもたない小農ばかり。豊定は屑米を粉に引いて、ヤキモチと云うものを年中食べて漸く喰いつなぐ小作農の悲惨な姿を、幼少時より目にしていたのである。

当時の農民の悲惨な生活に直面した豊定は農村に残る封建性打破に自らの使命を燃やし農民運動へと、自ら駆りだしたのである。

山崎豊定は、日農創立大会の開かれた翌大正12年4月、鳥取県西伯郡内の4組合とともに「日農山陰連合会」を結成するのであった。

「やすぎ歴史散歩」46『安来タイムズ』昭和58年10月5日

—山崎豊定① 夜明け—（安来の文化を考える会）

「明治31年能義郡母里村に生まれ学業を了え20才の若さで当時の農民の実態を憂農村の封建

性打破と民主化を叫び…」(桜井三郎右衛門筆、山崎豊定顕彰碑文より)

大正12年(1923年)日農山陰連合会結成に参加した豊定であったが、同年12月日農からの離脱を行い、能義郡内13組合、約600人の農民の参加を得て、独自に能義郡小作連合会を組織し、会長となる。

豊定のこの日農からの離脱の根本的な原因は、農民運動のあり方から発生した。日農山陰連合会は、大正12年には、2割の小作料減免を、翌大正13年には永久3割減免を決議し、対地主小作料減免闘争に突入している。

豊定の、この穏やかな協調的農民運動は、大正13年八束郡小作連合会の結成、翌14年には能義八束小作連合会へ統合、拡大し、大正15年7月、能義郡安来町で開かれた「島根県小作連合会創立(約千人参加)」をもって、名実ともに、出雲地方の農民運動の中心をなしていったのである。「やすぎ歴史散歩」47 『安来タイムズ』昭和58年10月12日

山崎豊定②-日農からの離脱(安来の文化を考える会)

島根県小作連合会が指導した小作争議のなかで最も有名なものが、昭和2年(1927年)の赤江事件である。

事件を報じる『山陰新聞』は、「能義郡に於ても小作争議の最も激甚の地といわれている赤江村の小作争議で、同村大字越前中島坂田の3部落に於て先日地主より立毛の仮差押へ処分をなし、12日競売に付せられた処、之に対しかねて激昂していた小作側は他の組合員の応援を得て千余名現場に押寄せ、中には棒の先へ鎌を付する等不穏の行動に出たる」と、その様子を伝えている。

この赤江事件は偶然に発生したわけではなくそれまでの小作争議の最終段階に位置していた。赤江村では、大正13年に、赤江村西部農民組合(会長国須万市、組合員=10名)が結成され、同年反別3斗の永久減免を地主に要求する。小作人173人、地主95人、反別177町歩におよぶ大争議は、一部をのぞき農民の勝利と終わる。翌15年、稲作は凶作となり小作側は、再び反当り2斗の一時減免と未解決の永久減免の解決を要求して争議にはいった。小作側は小作米の不納同盟をむすび、生産米を売却して持久戦へ。地主はこれに対して動産差押えで対抗した。が、これも、地主側の敗北におわる。

翌昭和2年、地主側は先んじて攻撃をかける。刈取りまえの稲の立毛差押えを申請したのである。

だが、執達吏が現場に急行した時には、前夜のうちに小作人組合員など130人の手によって大部分刈取りをおわってしまったあとであった。そのため、わずか9反7畝を差押えたにすぎなかったのである。

数日後、この刈取った稲の競売処分にあたり、先に述べた千余名の実力行使“赤江事件”が発生したのである。

事件後、組合幹部16名は、“公務執行妨害並暴力行為等処罰に関する法律違反で起訴、山崎豊定、国須万市両名は八カ月の懲役刑を受けたのである。

以後、幹部指導者を失った出雲地方の農民運動は相前後するファシズムの到来とともに衰退の道をたどりはじめるのであった。

いま、かつて燃えあがった赤江の地には山崎豊定顕彰碑が、農民運動に注いだ情熱を内に秘め静かに座しているだけである。

(参照、『小作組合の結成と発展』森安章著)、(安来の文化を考える会)

第 4 節 山崎重一郎と松次郎兄弟の苦悩

山崎家は、地主でもなければ小作人でもない自作農であった。いわばイギリス経済史の中で言うところの独立自営農民的存在であった。比較的裕福な我が家であったが、小作人の惨状に同情し、農民運動を立ち上げた山崎豊定は山崎家に大きな混乱を持ち込んだ。本業の農業は妻に任せ、外では社会的反逆児であったからだ。小作人は反地主運動はできなかった。即日、借地を地主からとりあげられるからだ。山崎家は自作農であるから生活はできた。しかし山崎家は朝から巡査に付きまといわれたり、重一郎が小学校に登校すれば、校長室に呼ばれて憲兵から「お父さんはどこに行ったのか」と尋ねられた。我が家の生活環境は一変してしまった。

父には弟がいた。松次郎は幼いころから秀才誉高かった。彼は飛び級が認められ、旧制松江中学4年生で旧制松江高等学校に入学した。旧制松江高校3年生の時に、その当時、秀才仲間と憧れの的であった建国大学入学を志望していた。しかし、願書を提出した後に、建国大学から受験を拒否された。その理由は、彼の父親である山崎豊定の思想的問題が要因であった。農民運動のリーダーは左翼的思想の持ち主と判断されたことに怒りと失望をもった弟は、失意のうちに建国大学受験をあきらめざるを得なかった。そして父親の政治的活動を憎んだ。その結果、大阪帝国大学紅医学部電気工学科に不本意ながら入学した。^(注3)

他方、長男である山崎重一郎は、良き軍人たることを望んで、模範的な軍国青年となっていた。父親の豊定に対する世間の批判的な視線を意識して、何事にも積極的に参加した。その結果、徴兵検査を受ける前から軍事訓練を進んでうけ、砲撃的技術も磨いていった。その成果が現れたのが、甲種合格後、彼は軽機関銃の射手となるのである。

軽機関銃の射手は、1分間に300発の弾が発射できる銃を持つことを意味する。一般の兵士は、1分間に一発ずつしか発射できない銃を持つので、戦闘が始まれば、敵兵はまず軽機関銃射手を殺すことを考える。その非常に死亡率の高い軽機関銃射手を志向したわが父親はとても

勇気ある、危険な選択をしたと言えよう。

第2章 日中戦争開始と第63師団第10連隊、高橋部隊の果たす役割

第1節 日中戦争（支那事変）の展開過程

昭和恐慌後、アメリカの移民禁止法によって移民先をアメリカから断られると、日本は満洲に目を向けた。

1931年、柳条湖事件に端を発した満州事変が勃発、関東軍（大日本帝国陸軍）により満洲全土が占領された。関東軍の主導のもと同地域は中華民国からの独立を宣言し、1932年3月、満洲国の建国に至った。元首（満洲国執政、後に満洲国皇帝）には清朝最後の皇帝・愛新覺羅溥儀がついた。

その後、中国の蒋介石、毛沢東、などによる抗日戦争が激化して、日中戦争となった。日中戦争は1937年7月からほぼ8年間にわたった日本の中国に対する侵略戦争のことである。現在の北京郊外で起きた盧溝橋（ろこうきょう）事件をきっかけに全面戦争へと進み、41年にアジア・太平洋戦争に拡大したのち45年の日本のポツダム宣言受諾・無条件降伏で終わった。その間、以下のような戦闘が展開した。

- (1) 盧溝橋事件
- (2) 上海事変
- (3) 和平交渉・南京戦
- (4) 徐州攻略
- (5) 漢口・広東攻略

この間、日本は多い時で約100万人の兵力を中国に展開した。両国の死者数は中国側は1931年の満州事変から45年までを抗日戦争とし、この間の中国軍民の死傷者について「3500万人余」を政府の公式見解としている。

盧溝橋事件が起きると、当初は不拡大の方針だった第1次近衛内閣は軍部先行で増派を決め、中国側は徹底抗戦に入った。日本は初めは「北支事変」、のちに「支那事変」と呼び、宣戦布告をしなかったが、これは米国の中立法適用を招いて軍事物資の輸入が出来なくなるのを恐れたためだった。

8月には上海で戦闘となり、制した日本軍はさらに首都・南京に進撃して12月13日に占領したが、その前後を含めて兵士も民間人も問わない南京大虐殺事件を引き起こした。

これに限らず、日本軍はこの戦争で毒ガスや細菌の使用、人体実験、性暴力など非人道的な行為を重ね、無差別爆撃もした。国民政府は南京から重慶に首都を移して抗戦を続け、共産党

の八路軍もゲリラ戦で日本軍と戦った。

不戦条約や9カ国条約も顧みない日本の戦争は国際社会からも非難されたが、41年には対米英開戦へと戦線を拡大していった。

(2007-11-26 朝日新聞 朝刊 東特集Aより)

父が戦争に参加したのは、(5)の漢口攻略戦であった。本作戦は支那の諸要衝を占領し、蒋介石の死命を制し、これを屈伏させようというものであった。参加兵力は第11軍、第2軍 計9個師団約30万人を超えるものであった。対する支那側の防衛兵力約60万に比較すると十分な兵力とは言えなかったが、支那事変中最大規模の作戦であった。

昭和13年初頭、戦面不拡大、軍備拡充を方針として陸軍予算を38億2000万円としたが、これを遙かに超え、新たに40万人の増員、24万人の新設部隊、軍需32億5000万を必要とするといった国力を傾けての大作戦で、これに伴い国家総動員法、同関連法は同年4月1日公布、5月5日から施行され、また5月下旬近衛内閣を改造し、政府として事変解決に新たな意欲を見せていた。(戦史 支那事変3 - FC2、holyywar1941.web.fc2.com/kindai-sina3.html)

第2節 漢口攻略戦と父の所属する高橋部隊の任務

父親の山崎重一郎は、昭和12年、20歳で松江63連隊高橋部隊に甲種合格で入隊した。1年後、岡山県の蒜山高原での軍事訓練に参加、そのまま広島宇品港行きの命令が下る。行先を知らされぬままに、中国の上海に上陸。その時、南京はすでに日本軍によって落とされていた。日本軍は、徐州及び南京ルートから中支のか漢口攻略をめざして進軍中という状況であった。

父の属する高橋連隊は、上海・蘇(礎)州、そして南京を経て漢口に向かって陸路を行軍し続けた。漢口攻略軍と上海とを結ぶ軍事ルートを確保する。これが高橋連隊の任務ということになる。

その際、漢口の自然要塞たる羅盤山を誰が支配するかが敵味方とも大きな関心事であった。この羅盤山を支配できたものが、漢口を支配できるからである。

第3章 山崎重一郎 軍隊日記紹介

第1段階 17歳の日記(昭和9年1月1日—12月31日)

1月1日

母里小学校にて母里在郷軍人会と青年学級(青訓)生として東方に向かって1934年を祝福する。

父親の日中戦争軍隊手帳

1月2日

同窓会、高橋振一郎宅にて

出席者

細田友二、小澤克巳、名和利市、田中利雄、富川一夫、運崎繁雄、須山薫、田中多吉、稲田利一、池田清吾、田淵忠市、加藤総一郎、岡田長市、来福忠、長前喜三郎

1月9日

弟の松次郎、副級長になる。毎日のように縄ない。俵あみ、祖父の広三郎と。

1月10日

稲をはで（刈り取った稲を乾燥するための杭棒で作った物干し）より入れる。前田（当時、それぞれの田畑に名前を付けていた）より（4枚のはで）祖父、祖母、母、俺の4人で取り入れる。

11日

稲扱ぎ（脱穀）、寺田さんと共同の機械で寺田経明、朝子さん来て。

1月15日

膝乗りさん（1年間の健康を願って祈り）、牡丹餅で祝う。青年訓練に出席、梅瀬成一さん指導員になる。

1月16日

寺田熊一君、稲扱ぎの手伝に早朝来てくれたが雨降り出したので帰った。

夜、朝日新聞社の活動写真（映画）が来たので小学校の講堂に見に行く。入場料大人3銭。

1月17日

向川原の田（田の名称）より稲入れ、1300束くらいある。

1月19日

須山秋子、久保田つる子、寺田、久保田富芳（とんさん）に手伝ってもらい稲扱ぎ終わる。

22日

大雪、近年にない雪。3尺5寸も積もる。

山 崎 勇 治

27日

発動機にてたおしぶき（糲摺り。）安田の松本さんより来て助けに来てくれる。原トノ、須山郁子、寺田経明、原文枝、忠昂にも手伝ってもらう。

2月2日

門松迎へ、大雪の中を須山桑蔵（くめぞう）、須山年雄と3人で。

2月13日

影平に依頼した筵代（むしろ作成代）、3枚で45銭。門松を建てる。

2月14日

旧正月元旦だ。

2月15日（正月2日）

土井茂市（もいち）、佐久保の春さん、正月挨拶礼に来る。

2月17日

看護婦の公枝（妹）、米子の病院（看護婦、広江病院）より法勝寺線（米子―母里間）の電車にて帰ってくる。

3月3日

松次郎、キング（雑誌）の懸賞で一等賞の自転車が当たり、その自転車が届いたので、近所の子供たちを呼んで祝いをする。

影平淑美、寺田栄子、中島安子、久保田博美、須山篤、須山優、須山国子、須山美枝子、久保田忠雄、久保田操、須山末子、須山ヤスエ、須山アヤ子、13名。買い物；魚代55銭、豆腐5丁、こんにゃく5丁

3月5日（正月20日）

20日正月、縄打ち（稲の藁で作るロープ、農作業には不可欠な縄）、原惣太郎、忠昂、久保田太一、須山仁三郎、須山年男、須山峯蔵、須山藤市とで。

終わって、家よりおごりで（毎年）一杯飲む。

父親の日中戦争軍隊手帳

3月6日

3月10日の陸軍記念日で、原惣太郎のおごりで、酒3升（金紫勲章）

寺田宅にいたら、「山火事だ、山火事だ！」と叫ぶ声がした。鎮守の森である「客神社」が、とんど祭りの残り火から火事となる。

仁三郎宅、手押しポンプ10台くらい来る。40分ばかり漕いだ。7時半、鎮火した。野次馬見物人多し。

15日

一宮籠り（女性の神様で、毎年各家庭が宿役となり、集落の女性を招待する習慣）。当番の原惣太郎宅。母と妹の藤枝が出席。

19日

須山邦子さんの結婚式。西市部落より後藤嘉吉さん、婿として来る。

21日

父（豊定）、出張先の東京、大阪、京都、奈良より帰る。

27日

野山役目（集落の共同草刈り場）、出席者；

影平繁市・末子、寺田経明・チヨノ、原忠昂・トノ、山崎重一郎・チヨ（祖母）。久保田増次郎・テツ子、久保田太一・ツル子、須山藤一・ツル子、須山皇蔵・秋子、須山仁三郎。

4月3日

光源寺の畑打ち（菩提寺の畑耕作）、須山峰蔵さんと。40銭（日当）。

17日

祖父（広三郎）と貞子（従姉妹の名前。後、妻となる）は出雲札打ちへ出かける。

30日

長台寺にて札打ち。祖父（広三郎）と貞子の2人は接待係、

山 崎 勇 治

5 月

2 日

早朝より稲の種まき（苗代作り）、広三郎、祖母のチヨと 2 人で。

4 日

祖母（チヨ）須山オクラさんと米子の城山、弘法太師さんへ参拝に。

どの家も蚕（かいこ）を飼っているので、祖母の代わりに蚕（かいこ）の世話を自分がする。

6 月

3 日

松次郎（弟）と干し田たたき（鋤で裏返した表土を細かく砕く作業）。毎日のように牛を使って干し田たたき。弟の松次郎を来させて作業を手伝わせる。

父に松江の原田時計店より腕時計を買ってもらふ。5 円也。

22 日

小麦扱ぎ（脱穀）と代かき（田植えができるように牛を使って水を張った田を柔らかに均す準備作業）の最中だ。田植え網（30間）を50銭で購入。上田商店より。田植え準備、殿川内（母方の祖母）の祖母も苗取りの手伝いに来る。

25 日

田植え。運崎孝一夫人、米原、稲田、影山定一夫人、坂本夫人、殿川内祖母など応援に来てくれる。

26 日

前田の田植え、土居、影山、殿川内の祖母などと。

28 日

祖父は佐久保へ田植えの手伝に行く。

30 日

田植えつん（賃）、85 銭也。

父親の日中戦争軍隊手帳

7月

13日

須山菊枝さん、松江へ 嫁入り。

19日

兵役満期で帰郷した浜崎、黒田茂雄、原田運一 3 人の出迎えに行く。

20日

井戸谷の射撃場にて射撃訓練。発射弾 3 発、命中弾 3 発。10点なり。

初めて実弾射撃をする。

23日

大雨が降ったので、迫田（田の名前）の田植え、母一人で。父はウドンこしらえ（作り）、機械にて。

9月

大雨のため、藁小屋が地しべり（滑り）のため倒れた。伯太川の弘鶴橋も流されたという。大災害である。

10月

1日

散髪、名和川（理髪店名）へ須山薫君と。代は22銭なり。伊藤武助（魚店）よりアジ購入、代金は300文35銭。

6日

客神社の遷宮の役目（無料奉仕）

影平、寺田清太郎、原惣太郎・トノ、重一郎、久保田増次郎、須山薫、須山善太郎、久保田清太郎、須山仁三郎・秋子、須山カネ、須山藤市

20日

客神社の正遷宮。お客さんは、菅原から藤井浅太郎、春喜、子供 2 人。

殿川内から祖母、幸雄。

山 崎 勇 治

千代田際市、
土居蔵市、
猪小路よりツネ、啓一郎、貞子
井上より、房枝、良子

井戸部落の田耕作面積調べ

1 町 9 反 5 畝 5 歩	久保田太一（小作農）
1 町 5 反 4 畝 18 歩	寺田経明（小作農）
1 町 5 反 09 歩	山崎広三郎（自作農）
1 町 2 反 3 歩	須山藤市（小作農）
1 町 18 歩	須山善太郎（小作農）
1 町 10 歩	原 惣太郎（小作農）
9 反 8 畝 2 歩	久保田増次郎（小作農）
7 反 1 畝 20 歩	須山新一（小作農）
6 反 3 畝 18 歩	須山峯蔵（小作農）
5 反 7 畝 20 歩	須山仁三郎（小作農）
1 反 5 畝 20 歩	影平繁一（小作農）

28日

荒神祭（火とかまど台所の神様） 須山新一宅に行く。

祖父（広三郎）、祖母（チヨ）、豊定、リヨノ、繁雄、重一郎、松次郎、藤枝。

11月

25日

青年の耕作田の稲扱ぎ（脱穀）。下町の実行場にて米すり（粃から米を取り出す作業）、4 俵（2 斗 2 升 5 合、くず米 2 斗 8 升）橋本（酒屋）にて一杯祝う。

出席者、米原伝太郎、瀬正義、影山清三、才原勝治、須山薫、橋本熊一

12月

13日

稲扱ぎ終わる。手伝人、寺田経明、原忠昂・文江、富芳、薫、太一、仁三郎・秋子。

父親の日中戦争軍隊手帳

米 1 表（60キロ） 4 等米代金10円40銭。

第 2 段階 赤紙召集から宇品港出航まで（昭和13年 1 月 1 日—7 月29日）

昭和13年 21歳

1 月

元旦

殿川内にて起床。自転車にて帰る。

小学校拝 拝賀式参列。

退営者 田中多吉

入営者 現役兵として 山崎重一郎、鶴田保朗、田中福吉、加藤総一郎、来福忠、長谷一郎、
梅瀬定雄 7 名

補充兵として 三上助雄、田中利雄、須山薫、名和利市、

小生、入営者を代表してととうとして一言はく。いくぶん良い気持ちになる。村長、助役、学
校長に酒を注いでもらったのも兵隊に出るからだ。

2 日

入営の準備。「雪乃屋」（小料理屋）にて坂本才一班長に逢ったので酒一杯出して軍隊生活の話
を聞く。約 1 時間。稲田、田淵 3 人。茶を飲み過去の話も 語り面白くなかった。

寺田経明、影平繁市さんより「雪乃屋」にてとても盛大な送別会をしてもらう。

本当に感激した。11頃帰った。父（豊定）は松江の寺子屋へ年始、松次郎のため。安部十二造
さんえへ。

5 日

部落の人が入営を祝って門松を建てる。国旗を飾る。部落の送別会、寺田宅にて。

6 日

青年学校の送別会に青年団主催の送別会。

7 日

殿川内の祖父（文次郎）入営のためご祈祷を持ってくる。

山 崎 勇 治

8 日

入営準備の手伝は、久保田太一、忠雄、寺田、富芳、殿河内幸雄、加藤総一郎、海岳団を見送る。

9 日

別れの杯、8時半部落の人に見送られて出発。役場に寄り、挨拶。役場にてお神酒をいただく。
黒田の自動車で9時半出発。万歳万歳万歳の声に送られて。
安来駅より列車にて松江皆美館に投宿。
軍旗奉拝式。軍隊生活がいよいよ始まった。営内見学。
万年筆 2 円にて買い入れ。松次郎に記念として。

10日

松江六十三連隊入隊。

11日

教練、兵器

入隊式、各個教練、兵器の手入れを習う。陸軍墓地参拝。青年学校試験。

14日

基本体操、敬礼、学科。

15日

中隊長訓話。忠節の話。兵器検査。

16日

日曜日にもかかわらず山城神社や錬兵場などを見学す。角田班長の引率だ。
酒保（売店） 戦友川勝邦夫上等兵にアンパンを買って来てもらう。寢床の中で食べる。
菓子 5 銭、石けん 8 銭。
毎日毎日の教練、検査、訓話だ。

23日

日曜日は内務検査。酒保より戦友がアンパンを買ってもらい食う。

父親の日中戦争軍隊手帳

父（豊定）初めての面会に来てくれる。大変嬉しかった。餅をもって来てくれた。小遣い 1 円もらう。

26日

雪なり。異常に寒い日。古志原風は寒い。防御面を着ける訓練等々。

30日

松次郎、寺子屋より面会に来てくれた。時計修理代 2 円也。

2 月

1 日

本日より酒保行きを停止となる。体重62・3 キログラムある。

3 日

軽機故障。軽機関銃射撃をす。空砲15発。

6 日

基本射撃、200メートルで 5 発35点。班内で 1 番となる。酒保で田中福吉、三上助雄君に逢う。

11日

初めての外出（引率）市内見学城山。

17日

実弾射撃。10発で50点満点のところ、30発で大変に褒められる。(15点で合格)。俸給 1 円85銭受ける。

20日

祖父（広三郎）松次郎が面会に来た。雪が降るのに餅を持って。1 円80銭もらう。父より 1 円もらう。

3 月 6 日

母里青年学校より慰問に来る。母より久保田忠雄君に託して 4 円（大金だ）もらう。

山 崎 勇 治

10日

祖母（チヨ）、才原タカ、殿川内幸雄の3人面会に来たり。祖母より5円もらう。

12日

午後3時 渡満の部隊を営門前で見送る。田中利雄、為国良夫、三上助雄、内藤正巳、元気良く出征出発した。

4月

1日

検閲のために松江駅出発し、岡山県真庭郡今市村へ。

松江駅発、軍用列車にて米子にて20分停車、江尾下車、1時間休憩の後、行軍7里。宿舎到着す。

2日

蒜山の演習場、長さ4里、幅2里の広場。毎日猛訓練だ。建川台等等で。

8日

5里の行軍で、足尾神社参拝する。

9日

待ちに待った検閲だ。

10日

実弾射撃20発撃って3発当たった。450メートルよりを軽機関銃で撃ったのである。戦闘射撃75発撃って5発当たった。

12日

大命下る。急いで宿舎に帰営準備。1時間寝て、1時半出発、行軍で江尾駅には6時着いた。帰舎、宿舎（民宿）班長1升おごりで一杯。金川勇、坪倉、川中、佐藤、綿谷、山田。

14日

5班で21名のうち、18名野戦行き、3名は新設部隊へ、角田は保留となる。野戦行きの準備大変だ。

父親の日中戦争軍隊手帳

16日

一等兵に進級する。足立正一、9時ごろ営門前にて。戦友と別れる。

17日

駅前にて多くのお客を出迎える。祖父、才原治平、松次郎、面会に来た。

19日

第7中隊より施設の第10中隊転属を命じられる。松江新部隊本郷部隊高橋隊第5班。鶴田清さん、二班へ入隊して来る。

23日

遠藤礼一伍長の指導で剣術する。

24日

入隊以来初めての単独外出をする。石山君と矢倉班長と3人。

26日

靖国神社大祭。陸軍墓地へ参拝す。

28日

足立一智、浜崎勝好君の戦死の公報を聞く。

29日

天長節、外出す。石山、堀尾、松本、城山等と。

30日

浜崎繁雄、梅瀬成一面会す。

父に手紙を書く。

5月

13日

演習行軍中、久保田太一、名和川さんに母が頼んだ手紙を彼らから受け取る。

山 崎 勇 治

15日

山崎繁雄、面会に初めて来てくれた。早速2人で松義山の寺子屋の松次郎を訪ねて一緒に一杯飲む。小使い6円50銭もらう。帰りに山尾儀一さんの宿舎に寄り、別れをする。明日戦場へ出発とのことで、米原、吉川、植田、梅瀬、田淵清さんなど来ていた。影平繁一さんより朝日(たばこ5箱)もらう。

29日

松次郎、面会に来た。須山年雄君3人で営舎前にて写真を撮る。須山仁三郎、稲田利市、久保田忠雄、殿川内幸雄さん等へ手紙を書く。写真代1円。俸給2円25銭。

6月

5日

弟、面会に来る。才原治平さん面会に来てくださった。酒保で一杯出す。
腹痛と頭痛で休む。

9日

入院になるとは思わなかった。

12日

退院する。石山みのる君、度々きてくれる。

26日

野島鉄之輔さん、岩崎音二郎、松次郎面会に来た。2時間くらいも話す

30日

野営準備。軍装検査する。

7月1日

蒜山へ演習のため(今回で2回目) 1時起床して松江駅5時50分出発。江尾駅下車。行軍1時間半ごろ、蒜山兵舎。

父親の日中戦争軍隊手帳

2日

演習、毎日のように。

第2次検閲のため目的地到着し、受験せんとの時、出動命令下り、松江へ帰営準備。

12日

第2次検閲受験のために目的地到着し、受験せんとする時、出動命令下り、松江へ帰営、出征準備。

13日

父、面会に来てくれた。時計を買い入れのことで松江に一泊する。

俸給2円31銭。受ける。

14日

新品の軍装を受ける。才原治平さん、面会に来てくれた。4時ごろ面会、父、母、祖父、祖母、啓一郎、忠雄。

母より10円もらう。父より時計18円と10円もらう。

15日

いよいよ出征だ。1時、営舎出発。行軍にて松江駅前集合し、松次郎、豊定（父）面会1時間ぐらい。別れを惜しんで3人で一杯飲む。3年もしくは永久に別れとなることも。

1時30分、父に見送られ汽車は走る。米子、鳥取谷川駅にて播丹線乗り換え、大門駅下車。1里の行軍にて高岡の陸軍営舎に入る。

16日

保式軍装検査のとき、陶山重寿君と1時間くらいも話をする。

23日

軽機関銃試験射撃のために姫路市ヘトラックにて6里の道を。相当の成績にて褒められる。

27日

午前4時に起床して出発準備。青野ヶ原を後にして行軍六里、姫路に向かう。

28日

3時半、姫路に到着し、39練兵場にて休憩。

7時半ごろ、浜野2等兵と吉田町福田方に入る。民宿だ。酒、ビール等で大歓迎だ。

電器バリカンで散髪をする。生まれて初めて電器散髪器で刈る。

姫路市吉田にて福田吉兵と8時起床。班長矢倉、門脇班長、鶴田清と4人で写真を撮る。

第3段階 広島宇品港出帆から武漢攻撃命令前まで（昭和13年7月29日—8月29日）

10時30分、福田宅を後に市内行軍。旗の中を進む。人の中、歓迎だ。

広島より宇品港へ。戦備品船に積む。

30日

馬と自動車や大砲を。5時、乗船する。万歳万歳万歳の見送りだ。

神見丸の御用船だ。6時、錨を上げ出航だ。祖国よ、さらばだ。親、兄弟、親類の見送りもなし。

31日

6時起床。座ったまま点呼。7時ごろ関門海峡通過。これらの予防注射。波はなし。天気は曇りだ。お礼のはがきを書いた。船の中、玄界灘、大揺れ、飯も食べられない。船酔いだ。行き先は誰も知らない。しかし上海へとの噂だ。

8月

1日

船の中で6時起床。どこを見ても島は見えぬ海の中だ。波は高い小山の様な波が来る。

2日

同じく6時起床、見れば海水は変わった色だ。揚子江だ。両岸が見えて来る。日の丸の飛行機が護衛のため15機くらい飛んでいる。船は港で停泊している。

3日

6時、船が動き出し、2時間後九港（ウースン）に到着、上陸だ。

1年前の陸戦隊の上陸作戦等々を想う。大変な犠牲の上に。上海まで3キロの行軍であったが、何年来の暑さとのこと、兵隊が倒れる、水をかけ大変な行軍である。

5時頃上海疎開の紡績工場へ入る。戦闘で壊れた建物ガラスが壊れたあばら家だ。

父親の日中戦争軍隊手帳

4日

工場にて6時起床。飯盒で飯を炊く。休憩。昨日の行軍で11中隊の兵隊が死んだとの事だ。久しぶりの入浴。酒保へ行きサイダー一本買って飲む。

5日

紡績工場4階建ての大きなものだ。コンクリートにコモ（藁で荒く織ったむしろ）を敷き、3人位で寝る。

上海の日本疎開を本庄少佐の引率で外出。日本人、イギリス人、アメリカ人インド人等等。

6日

紡績工場を出発、行軍で南翔に向かう。途中暑さのために10数名倒れた。7里ほどの行軍だ。俺は軽機関銃を担いでの行軍だ。夕方、南翔に着く。お寺にて宿泊。蚊にはくたぶれた（大変困った）。

7日

お寺にて4時起床。本隊より分かれて3里離れて黄渡鎮に分頓のため、山田少尉以下小隊で10時到着し、長谷川部隊と交代準備に。

8日

第一下士、哨に立つ、4人で。松村、小川、小山一等兵とである。敵の銃声はいたるところで、大変な敵前だ。犬の遠吠え、気分の悪いものだ。昼には支那人の通行が相当あり、それを検査するのである。

9日

6時、開門。沢山の通行だ。午後6時、交代し、宿舎に帰る。大雨、大風となる。巡行乾燥野菜を大きな鍋で煮る。1時 森本伍兵、鶴田伍（衛生兵）と3人で巡行に出る。自治会へ行きお茶をよばれシャン酒を飲んで帰る。

10日

森本伍兵と2人で巡行（討伐）に出る。家を一軒一軒叩き調査をする。4時より第3下哨に出る。船の中に入り、検査等の仕事だ。銃声は毎晩のように。早朝からは毎日だ。

山 崎 勇 治

11日

3時起床。討伐に出る。小生は第一分隊の軽機の騎手で、張家村へ行き、家を焼き、敵兵を17人射殺する。自転車2台、山羊2頭持ち帰る。

12日

大隊の討伐。無事全員帰る。

18日

敵兵、鉄道・・・・・・・・黄渡鎮駅へ出動す。？

21日

黄渡鎮の町より匪賊（集団で略奪などを行う盗賊）らしき人間7名を収容す。俸給8円80銭受け取る。

下士官志願を隊長より勧められるも、伍長軍属に対するのは慣れるのだが、故郷の祖父を始め反対で、祖父も60歳を過ぎ、帰ってくれと手紙が再々来る。祖父祖母の姿を想うと出したい志願も出来ない。

第4段階 武漢三鎮攻撃命令から赤犬肉事件まで（昭和13年8月30日—10月30日）

8月30日

武漢三鎮攻撃参加命令下る。黄渡鎮を引き上げ、嘉定に向けて出発。

10月

1日

出発準備。交代部隊の到着を待つ。交代部隊初陣来る。直ちに出発。懐かしの黄渡鎮を後に行軍。南翔を通過し、嘉定に10時半到着。軽機関銃が重く、肩が痛い。出発準備、背囊、防毒面などなど。

3日—4日

中隊・大隊の軍医の検査など。

5日

行軍にて南翔駅2時20分乗車。貨物列車にて60名も入られる貨車の中で寝たり起きたりだ。徐州へ6時到着。

父親の日中戦争軍隊手帳

6 日

徐州駅を 6 時 15 分発、南京に向かう。11 時 25 分、南京駅到着。時計のバンド 80 銭で買い入れる。完全武装にて 2 里行軍し、南京の宿舎に入る。敵の首都であった南京である。蒋介石を思う。

8 日

11 時、宿舎を出発、関門港に到着。行軍 2 里半だ。

5 時、乗船す。夜間は危険なので、船は泊まったまま早朝に動くとのこと。

9 日

7 時より船は動く。揚子江河の水の流れが急なのには驚く。大きな波だ。大きな河と出会うことだ。河岸より銃声を聞く。銃器、大砲などで封じる。5000 人位の敵とのことだ。

10 日

5 時頃九港に到着。九港も大きな街だ。

11 日

午前 8 時上陸開始。縄梯子で降りた。

12 日

トラック 100 台くらいと思う。分乗して出発。途中、山の中、川の中 40 里の行程にてジャッキに到着。銃声は絶えない。

大砲、機関銃等々。第一線だ。貨物列車で乾麺ポーをかじりながら朝まで暮らす。

死体がいたるところに転がっている。大変な匂いだ。牛馬の死体など 20—30 はある。

戦車、トラック、無数だ。第一戦へ第一戦へと行く。

1 日半、シャツ着干にて田の中で寝る。車の中で 24 時間だ。身体中が痛い。

13 日

羅盤山への中隊の攻撃の命令だ。午前 3 時、第 1 小隊は先兵となり、羅盤山へ登る。小生は軽機関銃の射手で険しい山をはいはい（息を切らせて）登る。

第 1 小隊、右第一線。山田章少尉の指揮だ。

軽機関銃で撃った、撃った。1 人で 530 発撃った。銃身が焼けて触れない。敵兵 500—600 人。

30 名ばかりを射殺す。激戦 5 時間、最後まで頑張ったが、敵多数のために退却。山田隊長、班

山 崎 勇 治

長（原野）と23名の兵士と11時に下山する。

この戦闘で戦死者、中村正一郎准尉（陶山が当番兵）、生田語（一等兵）、斉藤義夫。負傷者は13名。中隊本部のある山にて休む。

14日

昨日の激戦で休養である。原理班長以下軽機関銃の整備点検、次の命令を待つ。昼間は暑いくらいだが、大陸気候とか山の上は、夜は寒い。ガタガタ震えて眠れない。

15日

待機の姿勢。ススキの中、山の中腹だ。国定忠治を思い出す。また寒い夜が来ると思うと身が縮む。想うのは故郷では稲刈が大変であろう。祖父、祖母、父母のこと、弟松次郎、妹のことがまぶたに浮かぶ。

16日

いよいよ戦闘だ。大隊の攻撃。午前3時起床し、10中隊、11・12中隊、
第1線9中隊第2線

我々第1小隊は中隊の中隊の右、第1線、
砲兵の攻撃が始まる。（払拭戦だ。）

敵に分からぬように様にはおかぶり（苞隠）して接近しているので砲兵の攻撃が終わるのを
待って軽機関銃の攻撃とする。

敵兵10メートル先に居たので撃った、撃った。200—300発射す。

小生は射撃、隊長（山田）以下銃に剣をつけて一斉に戦闘。

原野班長は自分の前に弾が当たられ、その下にいた自分の喉へ当たる。もう一寸も下であれば
自分も戦死であった。原野班長は盲貫二発である。

朝日利吉さんは擲弾筒の射手だ。攻撃し敵の手りゅう弾で自分の目の前で戦死された。

自分は大したことがないので鶴田衛生兵に手当を受け、戦闘を継続した。腹の下にもう一発来た。
大変な激戦だ。

隊長は、羅盤山への一番乗りをした。自分も軽機関銃の射手でなければ一番乗りができたのだ。
かくして6時間くらいで完全に占領する。

17日

敵と対峙して夜を明かす。銃声止みなし。山の上だ。戦死した敵、負傷した敵15人位であった。

父親の日中戦争軍隊手帳

夜は三小隊の壕にて夜を明かす。銃声は止みなし。姿勢は低くしないと敵の弾もだが寒さも大変だ。

18日

夜明けとともに元へ帰り、壕掘りをする。小山、矢野、山崎、井上、安部、野山の7名だ。天幕支那人の毛布着用して休む。それでも寒い。安来節を歌って騒ぐなどに依り。山の中で寒いので。

19日

8時半起床。中隊指揮班へ結集し、井上准尉以下1分隊と擲弾筒2名、羅盤山より千メートル離れた棺木山にて陣地をした。夕方薄暮れを利用して交代して下山して2kほど行軍して大本部で休む。

20日

7時起床。9日振りに味わう地上の気持ち。何とも言えぬ気持だ。命があったかと。戦闘で3回位の命拾いをしたからもう死ぬことはない。家の神様のおかげだと思う。特に祖母の日参、雨の日も雪の日も、風の日も毎日毎日客神社、氏神様、不動明王様（守納にある）に手を合わせる。飯盒炊爨だ。

21日

7時起床。支那人の大きな家だ。10時より告別式。中村准尉以下20名の勇士ラッパ号音（曲海ゆかば）でいとも悲しくなる。木田、衣笠2人には特に心より哀悼の意を表す。

陶山君と芋掘りをして喰う。

10中隊は又交替して山へ登る。自分は久しぶりに中隊の予備隊となり指揮班に残留。穴が掘っているので白根君と入って休む。11時半頃まで休む。

22日

山にて7時半起床。数日目からの日記を書く。軽機の手入れは毎日だ。暇さえあれば軽機の手入れだ。

10時より白根君と不寝番に立つ。銃声は何時もしている。第一線だ。

23日

7時起床。軽機の手入れ。羅盤山へ連絡に行く。タバコ欠乏には困った。1本のタバコを10名位で吸う。半口ずつだ。交代の部隊が来たので引き上げて。第一線だ。

占領陣地を構築する。山の上で一夜明かす。銃声は絶え間なく。朝になったら一層激し弾が飛んで来る。雨あられと聞いたが本当の事だ。嘘ではない。

戦死者、岡部上等兵、衣笠一等兵、安達嘉太郎の3名。負傷者16名も出た。完全に陣地は空っぽせられた（徹底的に破壊された）。

24日

冬服が渡る（夏服と交換に）。これで寒さも若干良いと思う。いよいよ前線へ前線へだ。

25日

明日の出発準備だ。赤犬、豚肉を喰う。飯盒にもつめる。

26日

5時起床し、漢口へ向かって八時前に行軍。久しぶりの行軍。大弱りだ。弾の打ち合いの方が楽な様だが、何時弾が当たるかだが、行軍もつらい。

54連隊が前衛、12中隊、先兵中隊、9中隊、10中隊、11中隊、機関銃中隊、1大隊、野砲連隊、53連隊、自動車隊の行軍だ。長さが約2里半である。6時半ごろ寺に入る。寺に入って熱のため頭が痛く、腹痛とくだり（下痢）だ。何も喰わずに寝る。下痢8回位。付近の綿花畑に寝ては下痢だ。敵は500メートルのところにいる。

27日

6時起床。7時出発。1里ばかり歩いたが、歩けなくなり落後してしまう。自動車を待つ。9中隊の患者と一緒にになり部隊の最後尾の自動車部隊で夜、行軍にて。腹痛、くだり（下痢）でくたくたになる。

28日

自動車の中、9中隊の患者2人だ。26日の夕食より何も喰わずだ。大雨来る。自動車と一緒にになって初めてお粥を喰う。（飯盒で炊いて）。腹痛は治らない。自動車の中で、行軍。前線へ、前線へだ。

父親の日中戦争軍隊手帳

12月29日

自動車にて進む。人馬の死体はいたるところにころがっている。敵軍は、道路を破壊して逃げているので、直しての行軍だ。

銃弾は来る。文字通りの強行軍だ。しかし病気には致し方なし。しばらくの休養、揺れながら自動車の中だ。通山付近の本間部隊の病院へ入院する。病院といっても雨は漏る。藁が敷いてあるだけだ。

30日

腹痛は猛烈に痛い。粥食だが食べられない。便所（畑）通い。いたるところにクソだらけだ。

第5段階 入院から回復退院、大晦日まで（昭和13年10月30日—12月31日）

31日

朝食、カユが出る。とうとう後送となる。自動車にて8時間も揺られて陽新に到着。陽新は揚子江岸にてきれいな所だ。家はみな空爆砲弾のため壊されている。壊れた家の土間に藁を少し敷いて寝る。部屋は寒い。身にしみる。故郷の夢を見る。

11月1日

早くも11月となる。故郷の忙しいことを思う。ここは新陽だ。久しぶり酒保へ行き、タイの缶詰を買い入れた。寝たり、起きたり病人だ。腹痛、治らない。便所へ5回行く。やや少なくなった。入院生活はいやだ。早く戦友の居る第一戦へ帰って一緒に戦闘をしたいとつくづく思う。

2日

病人の多いのに驚いた。陽新で2000人近も居るらしい。盲腸炎らしい。

酒保（売店）は売れ切れで何もなし。藁の上で寝たり起きたり。

やがて時来るや、ウドンゲ（優曇華の花＝インドの神話で、3000年に1度だけ花を開くという想像上の植物。きわめて稀なことのたとえに使う）も一人で咲くであろう。

3日

明治節。故郷では菊の紀元節。明治節なので祝いにほまれ（煙草）1ケ、羊羹1本、菓子1箱もらう。飯も相当食べれる様になるが、時々差し込んで来る。部隊に早く帰りたい。

山 崎 勇 治

4 日

朝食後、腹ごなしに芋掘に行く。芋をゆでて食う。芋汁もして（作って）喰う。酒保が来たので、ミカン 1 個、ゆで小豆 3 個、昆布 1 個、サイダー 2 本買い入れる。
部隊は通山の激戦で相当の戦死者、又負傷者が出て入院してきた。

5 日

イモを茹でて食う。元気になる。便所に 3 回行く。
早く原隊へ帰って戦友と一緒に奉公せねば。今日の戦いにあけに染まってニッコリと笑って死んだ戦友が「天皇万歳」と残した声が忘れられようか。

6 日

雨降りとなる。羊羹 4 本、小豆四個買い入れ。歌を歌って踊り、軍歌を。
七中隊時代よりの初等兵、石山みのる君、通山の激戦で「中隊長やられました。もういけません。天皇陛下万歳！」としっかりした声で叫び、3 回目はかすかな声で帰らぬ人となった。思えば、入営以来、一緒に暮らした優秀な石山君だった。軍務精神旺盛だった石山君。靖国神社に祭られ護国の神として永遠の眠りにつくであろう。
郵便貯金、11月10日現在36円50銭

7 日

日高倉 1 等兵と新陽の町を散歩す。小さな港町だ。母里の町くらいだ。
下瀬部隊病院 山田病院生活もすっかり飽きた。原隊へ帰りたい。

8 日

九港へ転送となる。船にて陽新港10時半出発、4 時に九港へ着く。直ちに自動車にて病院へ。
夕食も済まして、2 段式の汚い室に 7 名も入る。
加藤軍曹、高倉上等兵とも別れて一人。原隊復帰を申し込んだがはねつけられる。考えてみればまだ体力がない。

9 日

煙草一ケもらう。酒保へ行く。金もなくなった。

父親の日中戦争軍隊手帳

10日

九港の街もすっかり変わって良い街になっている。毎日面白くない本を読んでいる。

11日

診断を受けた。まだ退院ができないとのことだ。貯金をとうとう出す。15円也を。

外出をして中島正君に逢い、ビールを飲み2時間も話す。人生22年にて戦死した石山稔君の霊に心より冥福を祈って止まず。

11号室の隙間風と寒さが大変だ。

12日

夕方から気温が下がった。雪でも降り出しそうな寒さだ。

毎日病院生活には飽きた。早く戦友のところに帰りたい。内田利夫君と外出して2時間くらい散歩する。下給品、菓子、キャラメル、アンパン等々買う。

13日

手紙を書く。祖父、母、弟。婦人クラブを読む。日用品、下給あり。

クーニャン（姑娘）に洗濯を頼む。10点ほどで20銭やる（支払う）。

九港の物品は高いので参考までに書いてみる。

うどん 1 把 30銭

ロウソク 1 本 8 銭

ぜんざい 1 杯 20銭

マッチ一箱 3 銭

餅一皿（5 個）30銭

大根 1 本 5 銭

ゆで小豆 50銭

ミカン 35銭

生姜 2 株30銭

酢 35銭

餡マキ 3 個 19銭

饅頭 3 個 19銭など等だ。

山 崎 勇 治

14日

初めて霜をみる。好天気となる。九港の街に外出。賑やかことだ。
散髪をする。20銭。

15日

診断を受ける。まだ退院できないとのこと。貯金をとうとう出す。15円也を。
48日振りに入浴。いい気持ちとなる。

16日

外出し、日本の豆腐40銭にて買い入れ。落花生、夏豆、ビール、みかん、クジラのクワンづめ
(缶詰)、など。パン1個(下給品)をもらう(いただく)。
又入浴する。2回目だ。酒保にて羊かん2本、ぜんざいコーヒー、ゆで小豆を購入。

17日

部隊に帰りたい。小生の軽機関銃は渡辺生男君が代わりに持って戦っていることであろう。

18日

外出、1円50銭使う。

19日

酒保にて羊かん買う。

20日

待ちに待った原隊復帰の請願はじめて叶って、いよいよ帰れる、明日準備して。

21日

経理室に行き、軍衣、靴下、背囊、防毒面、銃剣、受領し出発準備。
病院に侍従武官が来られたそうで大騒ぎだ。
待ちに待った原隊復帰だ。口山の訓練所に行くか、勤務か？

22日

7時起床。軍装を整えて病院の発着部へ集合。行軍にて第5兵站へ行く。12時発の自動車にて

父親の日中戦争軍隊手帳

口山の名誉訓練所へ入所した。第3中隊 第3班へ、36名だ。

上は口山という険しい山だ。日本では想像できない位の山。支那の陸軍師範学校があった所と
のことだ。山の下は、パイエン湖。大きな湖だ。

23日

全日休養だ。蒋介石の直轄将校を養成した軍官学校（士官学校）の夏季訓練所、大きなものだ。
大きな石を積んでの兵舎だ。

中隊長以下全員で飯当番。爆弾で空いた穴を埋めた。4時ごろまで。

酒保にて缶詰2個、30銭、買い入れ。

24日

7時起床。点呼。勅諭五か条。体操。休養。非常に寒い。

午後1時より体操、遊戯。2時40分終了。

休養。食事当番（夕食）。

25日26日

六時起床。休養。不寝番等々だ。入浴2回行く。

27日

診断を受ける。

28日

点呼、7時半。基本体操、休養。

傷の治療。毎日のように入室するもの、出ていく者で大騒ぎの部隊だ。

30日

侍従武官が明日来られるので、整理整頓

12月1日

経理室の使役5名で。薪をこしらえ（作り）作業、一生懸命だ。

武官来られる。

原隊復帰の用意、口山ともお別れだ。永久の別れと思う。口山名誉訓練所、岡本部隊。

山 崎 勇 治

2 日

6 時起床。懐かしの口山を後に原隊へ栗田君と一緒にだ。自動車にて 2 時間の後、九港到着。
仙田兵站司令部到着、11 時頃。
午後 5 時半に南京行の神光丸に乗船。一泊して。外套一枚では寒くて眠れず。

3 日

寒さの為、五時に目がさめる。満督倶楽部を読む。

4 日

祖父、母に手紙を書く。船の中だ。揚子江を下る心地良さ。武口 4 時ごろに到着。又寒い夜を
明かさねばならぬ。友達の毛布の中に入れてもらう。

5 日

船は 1 時半ごろ南京に着く。5 時、小舟にて上陸。直ちに連絡船にて兵站に着き、3 号宿舎に
入る（国民大会堂美術陳列）である。
毛布 3 枚受けてぐっすり休む。
南京の賑やかなのに驚いた。部隊は早くも出発していた。

6 日

5 時起床、8 時外出した。にぎやかだ。兵站に行き、被服の不足品を受領する。
一日中、街を見て回る。大毎の慰問団が来ていたので行くと、松平晃ほか 7 名、10 時に終わる。

7 日

外出 8 時より。雑誌『富士新年号』88 銭買い入れ。印鑑をこしらえる（作る）。1 円 5 銭なり。
明日はいよいよ原隊へ帰れる、蘇州へ。

8 日

午前 8 時起床。宿舎出発、南京の兵站前より連絡車にて懐かしい南京を後に城外の南京駅へ到着。
11 時 40 分発の列車にて蘇州へは 5 時 20 分着。徒歩にて兵站行き、一泊。

9 日

5 時起床。高橋部隊本部へ連絡のために外出。蘇州の街を見る。兵站の酒保にて親子丼である。
原隊に帰る連絡なし。困ったものだ。本部慰問団の活動写真を見る。「瞼の母」を見て涙を流す。

父親の日中戦争軍隊手帳

10日

午前より午後2時頃まで寝る。夕方より外出し広野部隊の酒保にて親子丼を食い、散髪をする。鼻髭も落とす。

11日

兵站宿舎8時出発。9中隊の班員四名。人力車（馬車）幌馬車で連隊本部に入り、12中隊の世話になる。連絡があれば原隊（10中隊）へ帰隊できるのだが暫くの辛抱だ。

12日

12中隊の指揮班だ。休養だ。久しぶりの雨。

13日

栗田一等兵はしらめ（虱）取りだ。

14日

矢倉班長と一緒にいる。寒さは増してくる。寒い日だ。

15日

自動車に分乗して常熟だ。6時半到着。10中隊の3小隊へ（は大隊本部勤務）に入って宿す。連絡があれば中隊本部に帰れる。常熟は米子位のような町だ。美しい支那服姿のクウニャンを見る。

16日

支那人には美人が多い。常熟は良い所だ。

17日

土曜日。蘇州の師団の慰霊室に6体の遺骨を持って3人で自動車で行く。森本軍曹、岸野、石山、野口春夫、夕方帰ってくる。

18日

常熟を出発してわが中隊本部のある許浦鎮へ帰る。舟にてクリークを3時間半もかかって。中隊へ帰隊し、中隊長に申告し三小隊に入る。揚子江岸で寒さが身に染みる。

山 崎 勇 治

白根一等兵など下士官志願兵はその舟にて常熟へ行って試験を受けるために。

19日

休養し、午後より早速未教育補充生の教育のための斥候教育の使役に出る。11時40分より山田中尉以下5名と町内準視察だ。

20日

大隊長、巡察のため来られるので大掃除。終わって休養。

21日

10時より部隊衛兵に出る。通行人もないのでさびしい。非常呼び出しあり、大騒ぎだ。弾薬も渡される。

22日

10時衛兵交代。休養する。

23日

2日間の予定で討伐のため、5時起床す。食糧2日分。連隊討伐である。支那人の家で火を焚き3時まで休む。飯盒炊飯だ。

24日

3時頃より行動開始。銃声を盛んに聞く。昨日に続き船にて河を渡り、匪賊に遭遇、迫撃砲、自動小銃を撃ってくる。12中隊に3名の戦死者が出る。

憲兵隊長、家の中を調べていて撃たれて戦死する。5時帰隊する。

25日

午前中休養する。酒があり大騒ぎ。飲む。久しぶりだ。安来節。拳も打つ。

9時ごろ、又討伐だ。俺は軽機の射手だ。中隊長と6名ばかり。敵に遭遇せず。12時帰隊。

今日は故郷、母里の歳末の市日だ。

26日

未教育補充兵の戦闘の演習だ。使役で。

父親の日中戦争軍隊手帳

27日

衛兵交代だ。池田上等兵司令。表門歩哨に立つ。1時間は長い。真面目に服務する。善哉をこしらえて食べた。

28日

山田隊長、今朝とうとう内地に帰られることになり、連絡船にて帰られた。
入営以来（新設部隊）一緒に面白く暮らしたのであるが、永遠の別れかと・・・。

29日

0時半ごろ、井上准尉と白根など4人が下士官候補に採用ならず帰ってきた。
便より来る。待ちに待った故国の便りだ。母より2通、兄弟、熊雄さんよりだ。懐かしく見る。
母と兄上（繁雄）へ手紙を書く。

30日

酒保品、煙草1円70銭買い入れ。缶詰45銭3個。琵琶缶詰2個35銭。麻雀台を作る。小山上等兵に頼まれて。母より送ってもらった『キング』の付録を見る。

31日

昭和13年も今日1日だ。軍隊生活も無事終わった事を氏神様、不動様、客神社に御礼を申し上げます。
来本も無事で過される事を神様にお祈りする。
靴下2足、襟布1本渡る。
中隊長、全快して3時頃帰られた。
明日は楽しい正月だ。
23歳になる。
思えば長いようで短い1年であった。
終生忘れられない年であった。
命拾いした年だ。
何度も死にそうであった。
元気で元旦を迎えることが出来て何よりだ。
手紙5通来る。
以上、父親の従軍日記はこれで終わる。

結びに代えて―戦争ではなく、話し合いで問題を解決を―

(私の幼少のころとダブる原風景)

父親重一郎の日記は17歳の日記(昭和9年 1月1日―12月31日)から始まっている。「母里小学校にて母里在郷軍人会と青年学級(青訓)生として東方に向かって1934年を祝福する」に始まる昭和9年元旦。正月が明けると、お米の脱穀、大雪、門松迎え、旧正月と正月挨拶の客人、縄打ち、陸軍記念、婚礼、お寺へ札打ち、一の宮籠り、稲の種まき、小麦脱穀、田植え作業、近くの射撃場で射撃訓練、大雨による大洪水、お寺に札うち参り、神社の遷宮、荒神祭り、どんど祭りと神社の延焼などの戦争前の日本の伝統的な農村の生活が記されている。それらには昭和20年生まれの私の年少のころの記憶とダブルものがある。

(戦慄が走る戦場)

ところが昭和13年の日記は一転して、赤紙召集と戦争準備それに戦闘の世界へと展開していく。同じ元旦でも赤紙召集状が届き、入営の準備から始まる。村長、助役、学校長にお酒で祝福され、家族や友人と最後の別れを告げ、万歳の声で見送られる。

入営して5か月半は、大山の裏面になる蒜山原までの行軍と軍事訓練や軽機関銃射撃の訓練で明け暮れている。そして7月30日には行先も知らされぬまま、誰の見送りもなく広島の子品港から出発している。海上で初めて上海行きが噂となる。

農村の純朴な一青年がかくも早く軍人となっていった様が描かれている。おそらく全国の農民の子弟がこうにして戦場に赴いたに違いない。

私は昨年4月、上海―南京―徐州を出張で旅をした。気の遠くなるほどの広大な大陸であり、長江であった。重一郎の行動範囲は、上海―九港―上海―徐州―南京―九港―羅盤山―九港とそれをはるかに上回るものであった。改めて父の遠大な行軍距離に驚いてしまった。

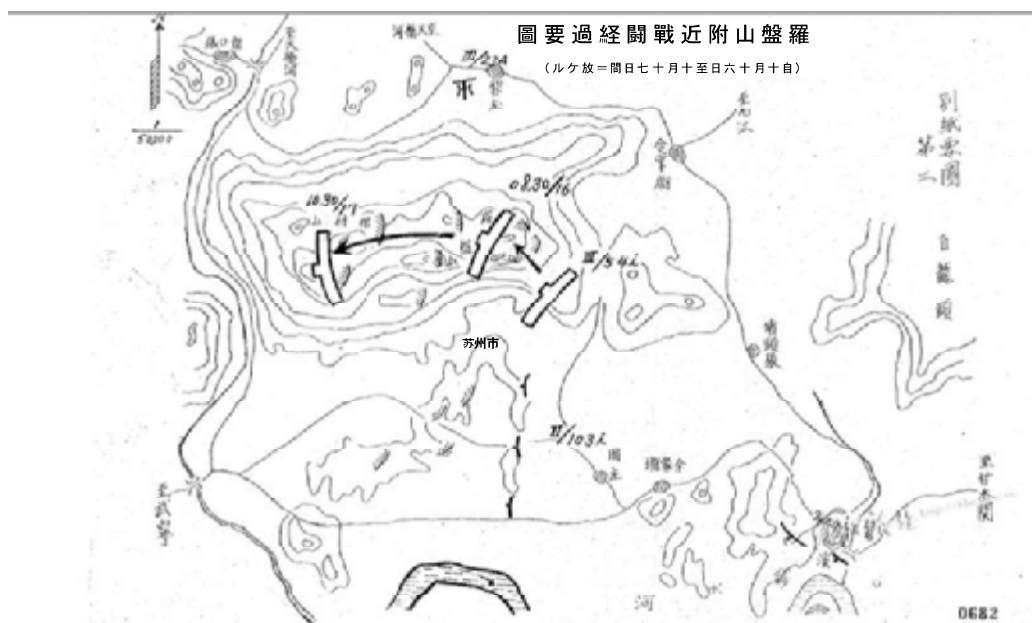
(知りたかった羅盤山)

「羅盤山の戦い」については私が子供のころから、酒に酔った父親から耳にタコができるほど聞かされたものである。いったいどんな山なのだろうか？子供心に知りたかった。四方八方尽くしたがついに分からずじまいであった。それがひょんなことで九江と漢口との間にあることが分かったのである。私のゼミ生であった元留学生の彭冰君と周家東君がこの論文の提出締切日に探してくれたのである。^(注4)

父親の日中戦争軍隊手帳



羅盤山





山中の塹壕

さらに驚いたことに、父親が戦ったその日の羅盤山の戦いについて記録された資料もあった。あの羅盤山とそれに続く棺材山の地図も添えてあり、日中双方にとって羅盤山は天王山であったのである。

上海と南京を手中に入れた日本軍は、漢口を陥れようと30万の軍隊を擁して、南京―漢口ルートを確保する必要があった。そのためには、漢口の屏風として立ちはだかっている羅盤山とそれに続く棺材山占拠が不可欠であった。

(父親の赤犬事件と筆者の存立存亡問題)

父の言によると、日本軍は広漠たる支那の点と線をかろうじて確保するものの、あたり一面、敵の兵に囲まれていた感あり、とのことであった。父の連隊は敵に包囲されてしまった。そしていよいよ「羅盤山の戦い」が始まった。父は死を覚悟した。

そして戦友の一人が捕えた赤犬をこの世の食い収めとばかりに食べたのである。翌日の行軍最中に激しい下痢と嘔吐襲われた。野戦病院の田の中で身動きができない状態になっていた。

父親の日中戦争軍隊手帳

約1か月半の闘病生活後に原隊に復帰した。

この羅盤山の戦いで高橋連隊のは6割の兵を失った。もし父親が赤犬を食べていなかったならば、1942年4月27日生まれの兄の武道と1945年6月18日生まれの弟の私はこの世に生まれていなかったであろう。身震いする思いだ。

(象牙の箸と軽機関銃)

父山崎重一郎は、私が物心ついたころから象牙の箸を愛用していた。鼈甲色の30センチメートルほどの胴長の箸であった。先端が尖っていないので明らかに中国の箸と分かった。彼はその象牙の箸をどのようにして入手したのだろうか。それは機関銃の射手であったことと関係している。すなわち、選ばれて機関銃の第1射手となった父は、平生は6人ほどのチームで行動を共にしていた。第1射手である父はチームの隊長となる。その他の構成員は第2射手、軽機関銃を解体して運ぶ兵、弾丸を持つ兵がチームを組むことになる。

さて、父とは別の軽機関銃隊に異変が生じた。軽機関銃のある部品を紛失してしまったのである。隊員は血相を変えて草むらの中を探すけれども見つからない。見つからないではすまない事態となった。

その夜、父はそっと自分たちの予備の機関銃部品を彼らに手渡した。後で、その部隊は金を出し合って父に象牙の箸を贈ったのだと言う。

父親は89歳で亡くなるその日までこの箸を使い続けた。最初は太い箸だったが、齢を重ねるごとに、細くなって、ついには折れるのではないかと思うほどやせてきた。彼の寿命と箸のそれとが競争しているかのようであった。

私は北九州市立大学国際教育交流センターで、韓国、ベトナム、中国、オーストラリア、イギリス、ドイツ、フランス、アイルランド（以前は、インドネシア、マレーシア、アメリカからの学生もいた）からの留学生の世話役を引き受けて35年になる。これらの留学生は日本人の学生と一緒に私の授業「日本事情」を受け、近くの市民センターでお国自慢の料理を披露し、そのお礼としてホームビジットを経験させてもらっている。

戦争中ならば考えられないことである。それは21世紀の日本のあるべき姿を現していると言っても良い。戦争で物事を解決しようとする時代は終わったのである。平和憲法を重んじ、相手を尊重し、話し合いをすれば、複雑な問題でもおのずと解決できるのである。

「世界中の人々が仲良く暮らすことが一番大切だ」、父親の軍隊手帳からそんなつぶやきが聞こえてくるようだ。

山 崎 勇 治

山崎重一郎の軍略歴

大正6年1月13日生まれ 父、山崎豊定・母、リヨノの長男として生まれる

昭和13年1月10日 現役兵として歩兵第63連隊補充隊第7中隊に入営

1月12日 青年学課程修得検定に合格

4月9日 第1期検閲終了

4月16日 1等兵

4月19日 軍令甲第21号により、歩兵54連隊第10中隊に転属

4月20日 松江歩兵第63連隊補充兵に編成着手

4月25日 編成完結

7月15日 屯営出発、兵庫県青野原弊舎に結集

7月27日 青野原弊舎出発

7月29日 宇品港 到着

7月30日 宇品港出航

7月31日—12月31日 戦争の毎日

広島・宇品港出発（7月31日）→上海（8月1日）→九港上陸（8月2日）→3時間半の行軍にて上海到着・紡績工場で宿泊（8月3日）→南翔向けて行軍→着・南翔着・お寺で宿泊（8月6日）→行軍・3里、黄渡鎮到着＝敵前（8月7日）→討伐→武漢三鎮攻撃命令（8月30日）→出発、南翔を経て嘉定に到着（10月1日）

南翔駅出発（貨物列車で泊）→徐州着（10月5日）→徐州駅発→南京駅（10月6日）→行軍3時間半で下関港到着→10月8日、船にて揚子江、5000名の敵兵の中を航行（10月9日）九港到着（10月10日）→トラック100台くらいに分乗、40里、24時間（10月12日）30台の戦車、トラック、死体、無数、田んぼで寝る→、羅盤山到着→羅盤山攻撃命令（10月13日）、羅盤山に登る、敵兵500人、戦闘5時間、敵兵多く、撤退、戦死者多数、山で寝る→攻撃命令待機、山の中、寒くて眠られず→戦闘再開、敵兵10メートル先、軽機関銃を撃ちまくる→原野班長は自分の前にて被弾。彼の後ろにいる自分の喉へ当たる。もう一寸も下であれば自分も戦死であった。原野班長は盲貫二発で即死。その後、腹の下に一発来た。大変な激戦、敵と対峙して夜を明かす。（10月16日）、→羅盤山より千メートル離れた棺木山にて陣地→交代休養。命があったのか、と祖母の神社日参に感謝（10月20日）→告別式（10月21日）→交代の部隊が来たので、引き上げ、陣地の構築に着手す→敵弾、雨あられのごとく→陣地は、敵軍に完全に包囲された（10月23日）→明日の漢口出発前に準備、赤犬肉を喰う（→10月25日）→漢口向けて行軍→54連隊が前衛、12中隊、先兵中隊、9中隊、10中隊、11中隊、機関銃中隊、一大隊、野砲連隊、53連隊、自動車隊の行軍。軍列、約2里半。500メートル先に敵軍。発熱、腹痛激化、綿花畑で寝る。下痢

父親の日中戦争軍隊手帳

おうと繰り返す（10月26日）→激しい腹痛のため、自動車部隊の自動車で、激しい敵弾の中行軍（10月27、28日）→通山付近の本間部隊の病院へ藁だけの畑地に入院（10月29日）→激しい腹痛のために自動車で8時間、陽新へ後方送り（10月31日）→10月31日—11月8日入院生活→回復し、九港へ復帰送りとなる。（11月8日）→九港の病院で復帰訓練→原隊復帰の許可（11月20日）→口山の名誉訓練所岡本部隊→九港→南京行きの「神光丸」に乗船→武口→南京到着、国民大会堂美術陳列所）にて宿泊（12月5日）→南南京駅から高橋部隊のある蘇州へ（12月8日）→常熟へ（12月15日）→許浦鎮（クリークを船にて3時間かけて）（12月18日）→2泊3日の予定で討伐に出かける→匪賊と遭遇し、3名の戦死者（12月23日24日）→12月31日 無事に大晦日。

昭和14年、15年16年の間の日記なし。この3年間において

昭和14年4月20日 上等兵を命じられる。

昭和15年9月29日至る10月20日 江南作戦に参加

昭和16年1月18日至2月1日 宣興南方地区作戦に参加

同年3月18日至3月25日 蘇南作戦に参加

昭和16年3月30日 内地交代帰還のために江蘇省常熟県常熟を出発

同年4月5日 上海出帆

同日 岡山中隊第48部隊に転属

4月11日 大阪港帰着

4月14日 陸軍兵長を命ず

4月15日 現役満期

4月16日 予備役^(注5)

注

(注1) 作野氏は戦後60年にして重一郎の軍隊日記を通じて、彼自身の軍隊時代をダブらせて思い出し、とても情熱を傾けることが出来た、と感想を述べていた。

(注2) 山崎豊定敗戦後、母里村長を経て、県会議員となった。彼の死後、農民有志の手で赤江事件の地に近い伯太川堤防に顕彰碑が建立された。

山 崎 勇 治

山崎豊定の石碑



山崎豊定（やまさきとよさだ 1898-1964）は、能義郡母里町の生まれ。大正から昭和初期の時代に、島根県の小作農民運動の指導者として活躍し、赤江事件、意東事件などの小作争議を起こしたという（島根県大百科事典 山陰中央新報社 1983 による）。字は片山哲が書いている。

（注 3）しかし、万事塞翁が馬の諺どおりである。彼は工学部電気工学科の学生であったお蔭で兵役を免除されたのである。

（注 4）拙稿を提出する直前に、私の20年前の教え子の中国人留学生の周家東君とホウ君が、中国側からの羅盤山の戦闘資料を提供してくれた。

驚いたことに、父親が戦ったその日の羅盤山の戦いについて記録された資料であった。父親の軍人手帳にも記してある羅盤山とそれに続く棺材山の地図も添えてあり、とても参考になった。

以下の文章と写真とを参照されたい。

1938年10月16日至17日，日军铃木支队为解救被困万家岭的第106师团，自瑞武路南下，在罗盘山、棺材山和甘木关一带与国军交战。

罗盘山附近战斗经过要图，绘制了日军铃木支队第五十四联队第三大队与国军第八军李玉堂部第一三三师的战斗经过，战斗时间是昭和十三年十月十六日至十七日（1938年10月16日至17日）。

1938年10月16日から17日まで、日本軍の鈴木支隊は万家嶺で囲まれた第106師団を救うため、瑞武路から南下して、羅盤山、棺桶山と甘木関一帯で国民革命軍と戦った。

「羅盤山付近戦闘に関する過程の図」で、日本軍の鈴木支隊第五十四聯隊第三大隊は国民革命軍第八軍李玉堂部第一三三師と戦闘の過程を描いている。戦闘時間は昭和十三年十月十六日から十七日まで（1938年10月16日から17日まで）である。

父親の日中戦争軍隊手帳

75年之后的2013年11月2日，武汉会战武宁战场遗址考察，攀登至海拔370米的罗盘山顶峰，看到战壕和单兵坑、机枪掩体主要 筑于山顶北侧，显然国军将士是把防御重点置于北面。但狡猾的日军先攻占罗盘山东侧的三角尖，再进攻罗盘山，从东侧突破罗盘山阵地。

（75年後の2013年11月2日に、武漢会戦武寧戦場遺跡を調査する場合では、海拔370メートル羅盤山の頂上を登ると、北側の山頂で塹壕や機関銃台等を発見できる。国民革命軍は防衛の重点を北の方に置き、日本軍は羅盤山の東側を占拠してから、羅盤山の攻撃が始まった。）

鈴木支队《忠勇美談集》之“歩兵第五十四聯隊第九中隊故陸軍歩兵軍曹松尾晴義”，记录了五十四聯隊第九中隊第四小隊松尾晴義小隊長在10月16日羅盤山战斗中遭我机关枪火力扫射，腹部中弹，小肠流出，重伤致死的经过，显示了国军将士顽强抵抗与日军的伤亡。

（鈴木支隊『忠勇美談集』の『徒歩軍第五十四聯隊第九中隊軍曹松尾晴義』は五十四聯隊第九中隊第四小隊松尾晴義小隊長が10月16日羅盤山戦闘中に国民革命軍の機関銃掃射をされ、腹部を撃たれ、腸流出し、致命的な怪我を受けた等の過程が記録されている。）

（注5）山崎重一郎は戦後、母里村会議員を1期、伯太町会議員を4期務め、町政に貢献した。彼の功績が評価されて、2005年度には「旭日単光賞」を受賞した。